死んでいる街

植崎健太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死んでいる街

【Ｎコード】
Ｎ７４４５Ａ

【作者名】
植崎健太郎

【あらすじ】
何も変わらない日常、しかし街はいつからか異臭を放ち始めていた。その異臭に気付いているのは自分一人だけ。少女は異変が起きていることを知る余地もなかった。

日常

臭い。生ゴミが腐ったような匂いだ。
家にいても外にいてもこの匂いは付きまとってくる。
今日もいつも通り蝿がブンブン飛び回っている。
「お母さん、ご飯は？」
「……」
返事は無かった。

家を出ると友人の麻美が立っていた。
「一緒に学校行こ」
「うん」
麻美は鼻歌を歌っていた。
この匂いは気にならないのだろう。
いや、麻美だけではない。
自分以外の人間はこの匂いが気にならないのだ。

○○第一小学校。
私はこの学校の６年生だ。
教室は４階。
最近、教室までの階段を上るのがキツい。
朝礼が終わると退屈な授業が始まった。
どうやら私はＩＱが高いらしい。
小学校の授業で教わることなど、もう何も無い。
周りから期待されていた。
悪い気はしなかった。
自分は選ばれた人間だ。
「朋美ちゃんは頭がいいから良い大学に入って良い会社に就職して
お母さんを助けてあげようね」先生が毎日言う台詞だ。

うちは母子家庭。
母親一人で私をここまで育ててくれたのだ。

学校が終わると携帯電話が鳴った。
「もしもし、朋美ちゃん？おじさんだけど今日もよろしく頼むよ」
私は駅に向かった。
駅で待っていたおじさんと会い、車に乗っておじさんの家に向かった。

おじさんはむさぼるように私に抱きつき服を脱がせた。
下着を脱がせると私をベッドに寝かせ、足をM字に開かせ私の陰部を美味しそうに舐め始めた。
30分程舐めると今度は私がおじさんの陰部を舐める。
毎回同じパターンなので慣れた。
この行為の意味を私は知っている。
ただ母親が働けなくなった今、この行為は私が生きる為にはしなくてはならない行為だ。
おじさんの陰部から白い液体が放出された。
しばらくして私はおじさんから5万円を受け取り、家の近くまで送ってもらった。
車の中にいても車から外へ出ても臭い。この匂いに慣れることは出来ないのだろうか。

「ただいま」
「……」
返事は無い。
相変わらず蝿がうるさい。
母親はいたが夕飯の用意はされていない。
宅配ピザを注文し、テレビをつけた。
ニュースがやっていたのでチャンネルを回し、アニメを見ていた。

ピンポーン

宅配ピザが来たようだ。
ピザを受け取りお金を払う。
配達員は何故か怪訝な顔で私を見ていた。
私の顔に何かついているのか？
ピザを食べる前に洗面所に行き鏡を見た。
特に変わった様子はない。
気にしないことにしピザを食べ、その夜は眠りについた。

異変

「朋美ちゃんおはよう」
「誰？」
「何言ってるの？麻美だよ」
その不気味な『肉の塊』はそう言った。
顔は焼けただれ皮膚は腐り肉片がぼとぼと地面に落ちている。
「違うよ！麻美ちゃんじゃ無い！麻美ちゃんはもっと綺麗だ！お前みたいに気持ち悪くない！」
「何言ってるの？朋美ちゃんだって同じじゃん」
慌てて鏡を見るとそこにうつっていたのは自分を麻美だと言う『肉の塊』と同じものだった。
「きゃあぁぁぁ」

悲鳴を上げ目が覚めた。
洗面所で顔を洗い、昨日のピザの残りをレンジで温め食べた。
しかし暑い。エアコンが無かったら汗だくで脱水症状になるくらいの暑さだ。
蝿が相変わらずうるさいが慣れてきた。
しかしやはりあの匂いに慣れることは無い。
「お母さん、学校行ってくるね」
「……」
母親は最近ずっと寝たきりだ。

玄関を開けると麻美が待っていた。
私は昨夜の夢のこともありビクッとした。
「おはよう。朋美ちゃん」
いつもと様子は変わらない。
「おはよう」

すると麻美は笑っていたのに突然、怪訝な顔をした。
まるで昨日の宅配ピザ屋の配達員が見せた表情と同じような感じだ。
「ねぇ朋美ちゃん、なんか変な匂いがしない？」
麻美もこの匂いに気付いてくれたのだ。
「そうなの。ここ最近ずっと匂うんだよね」
「そうなんだ」
そうして二人は学校に向かった。
二人は他愛もない会話をしながら歩いていた。
「そういえばさっきの匂い無くなったね」
「そお？」
麻美にはもう匂わなくなったらしい。
しかし私にはやはり匂う。

しばらくして学校に到着し、自分の教室に向かった。
昨日よりも階段がキツい。日に日に階段がキツくなっている気がした。
今日は体育がある。体力の無い朋美にとって唯一嫌いな授業である。
今日の体育は１００メートル走だ。
陸上選手になるわけでも無いのにタイムなんか計ってどうするのだ？
それでも朋美が走る番になり、しかたなく走った。
タイムは２２秒。前よりも遅くなっていた。
やたら息が苦しい。目の前が真っ暗になった。

ドサッ

目が覚めると保健室のベッドの上だった。
１００メートル走の後、倒れたらしい。
保健の先生はおそらく日射病だと言う。
私は気分も良くないので早退することにした。

帰り道、私は考えていた。
この匂いの原因は何か？
最近体力が落ちているのは何故か？
昨夜の夢は何か意味があるのか？
そうこう考えているうちに家に到着した。

「ただいま」
「……」
「お母さん、私どっか変かな？」
「……変じゃないよ」
私は母親の言葉を聞き安心した。

疑惑

次の朝、学校へ行くとき麻美が言った。
「ねぇ、思ったんだけど朋美ちゃんの家の近くが臭いんじゃないかな？」私は自分の家が臭いのだと言われている気がして気分を悪くした。
「あっ、朋美ちゃんの家が臭いんじゃなくてあの辺の周りがさ…」
麻美は朋美の態度を見て慌てて弁解した。
しかし一度悪くした気分はなかなか直らない。
気まずい雰囲気のまま学校に到着した。

今日は終業式だ。明日からは待ちに待った夏休み。
ある者は山へキャンプ。またある者は海へ海水浴。
それぞれが心を弾ませ、その日は学校が終わった。

母親もあんな状態でどこにも行く予定の無い私は退屈と戦う日々の始まりだった。

家につくと近所のおばさんが近づいてきた。
「朋美ちゃん、最近あなたのお家から変な匂いがするんだけど何か心当たりある？」
私は麻美とのこともありさらに気分を悪くした。
「私はおばさんの家から変な匂いを感じます」
「まぁ！」
おばさんは怪訝な表情で私を見ていた。

夏休みに入り何日間経っただろう？
宿題はほとんど終わっている。
日々生活をしている中でだんだんと匂いが強くなっている気がした。

蝿の数も増えてきたので蝿取り紙を設置した。

ある日テレビを見ていると、病気についての番組がやっていた。
何でもその病気に感染すると生きたまま体が腐っていくと言う病気だ。感染率がかなり高く、昔どこかの村の人達がこの病気のせいで死に絶えたらしい。
「それではこの病気にかかった人の症状をお伝えします…」

ピンポーン

玄関を開けると麻美だった。
「この前はごめんね。海に行ったからお土産買ってきたの」
『海まんじゅう』と言う珍しいまんじゅうだ。
「ありがとう」
「ねっ！今から遊びに行かない？」
「ごめん、今ちょっと大事な用事があるんだ」
私はテレビが気になり嘘をついた。
「そうなんだぁ…じゃあまた今度ね」
そう言って麻美は帰っていった。
急いでテレビを見るとすでにその番組は終わっていた。

その夜、私は布団に入りながら考えていた。
もしかしたらこの街の人達は例の病気にかかっているんじゃないだろうか？
生きたまま腐っていくから異臭を放つのではないか？
みんなはすでに自分から異臭が放たれているから慣れて匂いに気付いていないのでは？
そう考えると私の中で、つじつまが合ってきた。

病気

「……なんだって。そこでそいつが言ったらしいよ」
「……」
「ねぇ朋美ちゃん。聞いてる？」
「えっ？あ、うん…」
麻美の家で二人は他愛もない会話をしていた。
しかし私はずっと考えていた。
「ねぇ麻美ちゃん。最近体がダルいとか調子が悪いって思ったことない？」
「ううん、なんで？」
「そっか…なんでもない」
私は例の『病気』にかかった人の症状がどんなものなのか気になっていた。
麻美の様子はいつもと変わらない。
「日も暮れてきたし、そろそろ帰るね」
「うん、またね。バイバイ」

帰りに本屋によって病気の本を何冊か調べてみた。
しかし病名すらわからないので調べようがなかった。
とりあえず適当に何冊か買って家に帰った。

「ただいま」
「……」
私は自分の部屋へ行き、さっそく買ってきた本を読み始めた。
しばらく読んでいると例の病気と似たような症状が書かれている病名があった。

『ウィルス性生間腐敗症』

詳しく読んでみると、生きたまま体の『内部』が腐っていくらしい。
外側の皮膚などは腐らず、外見からは全くわからないのだ。
しかしほうっておくと突然死に至り、外側などもすぐに腐り始めるというのだ。
このウィルスは生きている人間からは感染せず、この病気で死んだ人間に触れるとたちまち感染すると言う。
そして驚いたのが、あくまで体の内部が腐り、外側が腐るわけでは無いので異臭を放つことは無いと書かれていたことだった。
この匂いは病気のせいでは無かったのだ。
私はそこで本を読むのをやめてしまった。
途中で読むのをやめずに最後まで読めばまだ救いようがあったとは、この時はまだ知る余地も無かった。

結局この異臭の原因はわからずじまい。
私は周りの人間が病気というわけでは無いことに安心したが、どこか腑に落ちない感覚でいた。
その時突然携帯が鳴った。
「もしもし、おじさんだけど今からいいかな？」
しばらくぶりにかかってきた。
生活費も少なくなってきたので私は了承した。
家の前におじさんの車が来た。その車に乗りおじさんの家へと向かう。

おじさんの家に到着し、いつもの行為を終えるとおじさんが言った。
「朋美ちゃん、今日はいやらいし香りがするね」
「…？」
いやらいし香りとは一体何だろうか？
変態の考えることは理解出来ないものだったが、この言葉が妙に気になったのを覚えている。

いつも通りおじさんから5万円を受け取り家に送ってもらった。

「ただいま」

「……」

「ねぇお母さん、私からなんか匂いする？」

「……何も匂わないわよ」

私は安心し、その夜は眠りについた。

感染者

８月２５日、夏休みも終わりに近づいた頃だった。

ガクッ

「…？」

体が動かない。起きあがろうにも力が出ない。

ピンポーン

誰か来た。しかし起きあがることが出来ない。

声すら出すことが出来ない。

私は必死で（助けて！）と叫んだ。

しかし声にならない叫びは届かなかった。

私は突然動けなくなったパニックで肝心なことを忘れていた。

そうだ！母親がいる。いくら寝たきりでもトイレか何かで起きてくるはずだ。

私は母親が起きて気付いてくれるのを待った。しかしいつまで経っても母親は起きてこなかった。

どれくらい時間が経ったのだろう？

何時間か何日間か。とても長い時間が経っている気がした。

バタン

突然玄関が開き警察官やら消防隊が入ってきた。

「ずいぶんヒドいな」

「警部、仏さんを二体、確認しました」
一体何を言っているのだろう？
「いや待て、こっちの少女はまだ息があるぞ！」
「君！君！大丈夫か！しっかりしなさい！」
「急いで病院へ運べ」
私は朦朧とする意識の中で思った。
きっと腐敗症の感染者は私だったのだろう。
私は何となく感づいていた。
この頃やけに体力が無くなってきたことや、自分だけが感じる異臭。
きっと私の体の内部が腐ってきているから私だけが匂いを感じるのだろう。
私はこのまま死ぬのだろうか？もっと早く気付いていれば治療出来たんじゃないのか？
あの時、本をちゃんと最後まで読んで病気の症状をもっと把握しておけばこんなことにはならなかったのではないだろうか？
いくつもの後悔をさまよう中、私の意識は無くなった。

ピッピッピッ

ピッピッピッピッ

何の音だろう？
私は手術室のような場所にいた。
いや、目は開かないのでわからなかったが何となくそのような場所にいるのだと思った。
「全く信じられないな」
「あぁ、まさか腐敗症の感染者だったとは…」
「運のいい娘だ」
私は耳を疑った。

私の運がいい？こんな病気にかかったというのに何故そんなこと…
そう思う一方、私は疑問に思っていた。
一体私はいつ感染したのだろうか？
感染の条件は感染者の死体に触れることだ。
私は今まで死体など見たことも無かったのだ。

「しかし母親の腐敗状況はヒドかったな」
「あぁ…死後２ヶ月は経っていたそうだ」
「腐敗症の患者で死後２ヶ月と言ったら相当なモノだよ」

母親が死後２ヶ月？
そんなことは有り得ない。
だって私は母親と会話したはずだ。
少ない会話だったが確かに声を聞いた。
何がなんだかわからない状況で、この後一番驚くことを聞かされた。

「この娘があの街の唯一の生き残りか」

えっ？私があの街で唯一の生き残り？
ほかの人達は感染していないんじゃ無かったのか？

うっ…

私は色々と疑問を残しながらも再び意識を失ってしまった。

真実

どれくらい時間が経ったのだろう？
私は気が付くと病院のベッドの上にいた。
「やぁ、お目覚めかい？」
白衣をまとった中年の男がやってきた。
「私は精神科医をしている田辺と言う者だ」
話しを聞くとここは私の住んでいる街からかなり離れた所にある総合病院らしい。
「驚くかもしれないが君は生きたまま体が腐ってしまう病気にかかっていたんだ」
私はそれなりに覚悟はしていたので驚かなかった。
「でも君はその病気のおかげで命が助かったんだ」
何を言っているのか理解出来なかった。
「君の住んでいた街の人々はある伝染病にかかっていたんだ」
田辺の話しによるとその伝染病にかかった人は体に何も変化は無いが2ヶ月ほど経つと突然死に至るらしい。
この病原菌は空気感染するらしく、感染者の半径1メートル以内に近づくと感染するらしいのだ。
まさか腐敗症のほかにこんな病気があったとは予想もしていなかった。
「私はなんで助かったの？」
「君は腐敗症にかかっていたおかげで体の中に入った病原菌が腐敗し感染をまぬがれたんだよ」
毒をもって毒を制するとはこの事だった。
「そうだ！お母さんは？お母さんはどこにいるの？」
「残念ながら我々が発見したときには既に亡くなっていた」
「そんな…亡くなった原因はなんですか？」
「腐敗症だよ。君はお母さんと普通に生活をしていたのかい？」

私は寝たきりだった母親の話し、生活費をどうやって稼いでいたか、そして夏休み中にだって会話をしていたことを詳しく話した。
「そうか…わかった。君はもう少し治療が必要だからゆっくり休んでいなさい」
そう言って田辺は病室を出ていった。

「どうですか？先生」
「完全に母親が生きていたと思いこんでいる。おそらく脳の部分が多少腐敗しているのだろう」
「そうですか…」
昼間だというのに不気味な雰囲気を醸し出している病院の通路で田辺と女の看護婦が会話をしていた。

その頃、私は自分が住んでいた街のことを思い出していた。
麻美も病気で死んでしまったのだろうか？
夏休みに入る前からみんなは既に病気にかかっていたのか？
あの異臭の原因は本当に自分の体内からしたものだったのだろうか？
その時、私はあることに気が付き医師を呼び出した。

「先生、私の体はもう治ったの？」
「あぁ、脳も腐敗していた為、記憶が少し混乱しているかもしれないが体のほうはもう大丈夫だ」
「そう…ですか…」
「心配しなくても大丈夫だからね」
そう言って医師は病室を出ようとした。
「あの…私の街のみんながかかった伝染病は？」
「あの病気についてはまだわからないことが多いが研究を進めているし大丈夫だ。君が心配することは何もないよ」
優しそうに微笑み、医師は病室を出ていった。

私は医師の言葉を聞き、言い知れぬ不安を抱えていた。
「病気についてはまだわからないことが多いが」
感染しても体に全く変化が無い。
私は麻美のことを思い出した。
「海に行ったからおみやげ買ってきたの」
「海に行ったから」
そう…その時既に麻美は感染していたはずだ。
いや、麻美だけでは無い。
夏休みに入ってからあの街の人々（感染者）はあちこちに出かけたはずだ。
私は幼いながらも頭を回転させ、ある仮説を立てた。
感染者には実はある特徴が出る。しかし感染者は感染者に現れた特徴に気付かないのではないか？
もし感染者には気付かない何かがあって感染者では無い者が気付くことがあるとしたら私は気付いているはず…
そう私は気付いていた。
この伝染病による恐怖はまだ終わっていない。
何故ならいつもと変わらずこの『異臭』は街中から漂っていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7445a/

死んでいる街

2010年10月9日04時56分発行